「頼政」「鵺」、そして「通円」

― 謡曲（能）・狂言姉妹曲の一考察 ―

松田　存

はじめに

謡曲（能）・狂言の作品研究に当っては、今更云うまでもないことであるが、まず本説（素材・典拠）とのか、わり、そして作晶が上演される際の演技演出面の考察と、概ね二本の支柱が考えられようか。そして今、こゝにとりあげようとするのは、本説を一に、舞台を一にする、いわば姉妹曲の一考察である。

今夏（平成十五年）、偶々、大学の公開講座で担当した「（中世）軍記物語謡曲（能）論」での「頼政」から、頼政と云えば「鵺」、そして源三位頼政が果てた宇治を舞台とする狂言「通円」を加えて、この三者の関係にアプローチしようとするものである。

そこでまず、これら三者の梗概を記してみることにしたい。

◇

「頼政」は、山城ノ国宇治の平等院を舞台に、そこで自刃した源三位入道頼政（一一〇五～八〇）の悲劇的な最期を主題とする世阿弥作の修羅物（「実盛・朝長」と共に三修羅と総称）である。

治承四年（一一八〇）、以仁王とはかって平家追討の令旨を出させて旗上げした頼政だが、事志と違って一敗地にまみれ、二人の子共々、怨みをのんで平等院の芝の露と消えた。その顛末を、宇治の里を訪れた遠国の僧（ワキ）に、頼政の霊の化身である老翁（シテ）が語りかける。―中入―

そこで、僧が回向すると、今度は頼政の霊（後シテ）が現われ、修羅の苦患ともいえる宇治川の合戦のさまを再現し、なおも僧の回向を所望しつつ、平等院の扇の芝の草の蔭へと消えて行く。

素材・典拠は、『平家物語』巻四の「橋合戦の事・宮の御最期の事」だが、後者には左のように記す。

源三位入道は、七十に餘つて軍して、弓手の膝口を射させ、痛手なれば、心靜に自害せんとて、平等院の門の内へ引き退く所に、敵襲ひかゝれば、次男源大夫判官兼綱は、紺地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧着て、白月毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗り給ひたりけるが、父を延ばさんが為に、返し合せ〳〵防ぎ戦ふ。上総太郎判官が射ける矢に、源大夫判官、内甲を射させてひるむ所に、上総守が童、次郎丸と云ふ大力の剛の者、萌葱匂の鎧着、三枚甲の緒をしめ、打物の鞘をはづいて、源大夫判官におし並べて、むずと組んで、どうと落つ。源大夫判官は、大力にておはしければ、次郎丸を取つて押へて首を掻き、立ち上らんとする所に、平家の兵ども、十四五騎落ち重なつて、つひに兼綱を討ちてげり。伊豆守仲綱も、さん〳〵に戦ひ、痛手をあまた負うて、平等院の釣殿にて自害してげり。その首をば下河邊藤三郎清親取つて、大床の下へぞ投げ入れたる。六条蔵人仲家、その子蔵人太郎仲光も、さん〳〵に戦ひ、一所で討死してげり。この仲家と申すは、故帯刀先生義賢が嫡子なり。しかるを、父討たれて後、孤にてありしを、三位の入道養子にして、

不便にし給ひしかば、日来の契約を違へじとや、一所で死ににけるこそ無慚なれ。三位の入道、渡邊長七唱を召して、「我が首討て」と宣へば、主の生首討たんずる事の悲しさに、「仕つとも存じ候はず。御自害候はば、その後こそ賜り候はめ」と申しければ、げにもとや思はれけん、西に向ひ手を合せ、高聲に十念唱へ給ひて、最期の詞ぞあはれなる、

うもれ木の花さく事もなかりしに　身のなるはてぞ悲しかりける

これを最期の詞にて、太刀のさきを腹に突き立て、俯しざまに貫かつてぞ失せられける。その時に歌詠むべうはなかりしかども、若うよりあながちに好いたる道なれば、最期の時も忘れ給はず。その首をば長七唱が取つて、石に括り合せ、宇治川の深き所に沈めてげり。

（角川文庫『平家物語』上）

武将といっても頼政は法体なので、後シテの扮装は専用面をかけ、特殊の頭巾（頼政頭巾）をつける。

◇

「鵺」は、源三位入道「頼政」（修羅物の能）の矢に射とめられた鵺の亡霊を主題とする切能物である。その「頭は猿、尾は蛇、足手は虎に似て、鳴く声が鵺の如く」であったゆえに鵺と呼ばれているが、近衛天皇の御宇に禁裏を騒がせた悪心外道の変化である。

三熊野参詣の旅僧（ワキ）が、芦屋の里で行き暮れ、海に突き出た御堂に泊まっているとあやしげな舟人（シテ）が現われ、問答を重ねるうち、頼政の矢に射とめられた鵺の亡霊であることを明かして、夜の波に消えていく―中入―のだが、クリ・サシ・クセでその顛末が語られる。その鵺は、最後にうつほ舟に封ぜられてかの淀川に流されたのである。

そこで旅僧が、御経をあげて鵺の亡霊を弔っていると、鵺の霊（後シテ）がかつての姿で現われ、その最期のさまをみせ、

海上にさし出る月とともに消えて行くのである。

いわば陰惨な主題だが、頼政の矢に射とめられる場面の再現のほかに、謡いとしてのききどころもある。素材は、『平家物語』巻四「鵺の事」で、

そも〳〵この源三位入道頼政は、攝津守頼光に五代、參河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なりけり。保元の合戦の時も、御方にて先を駆けたりしかども、させる賞にも預らず。又平治の逆乱にも、すでに親類を捨てて参じたりしかども、恩賞これおろそかなりき。大内守護にて年久しうありしかども、昇殿をば許されず。年闌け齢傾いて後、述懐の和歌一首詠みてこそ、昇殿をばしたりけれ。

人知れぬ大内山の山守は　木隠れてのみ月を見るかな

これによつて昇殿許され、正下の四位にてしばらくありしが、なほ三位を心にかけつゝ、

上るべきたよりなき身は木のもとに　しひを拾いて世を渡るかな

さてこそ三位はしたりけれ。やがて出家して、源三位入道頼政とて、今年は七十五にぞなられける。

この人、一期の高名とおぼしき事は多きが中にも、殊には仁平の頃ほひ、近衛の院御在位の御時、主上夜な〳〵おびえさせ給ふ事ありけり。有験の高僧・貴僧に仰せて、大法・秘法を修せられけれども、その験なし。御悩は丑の刻ばかりの事なるに、東三条の森の方より、黒雲一むら立ち来て、御殿の上に覆へば、必ずおびえさせ給ひけり。これによつて公卿僉議ありけり。「去んぬる寛治の頃ほひ、堀河の院御在位の御時、主上、しかの如くおびえ魂ぎらせ給ひけり。その時の将軍義家の朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御悩の刻限に及んで、鳴弦する事三度の後、高聲に前の陸奥国守源義家と名のりたりければ、聞く人身の毛堅つて、御悩必ず怠らせ給ひけり。しかれば則ち先例にまかせて、武士に仰せて警固あるべし」とて、源平両家の兵の中を、選ませられけるに、この頼政をぞ選び出されたりける。その時は未だ兵庫頭にて侯はれけるが、申されけるは、「昔より朝家に武士を置かるゝ事は、逆反の者を退け、違勅の輩を亡さん

が為なり。目にも見えぬ変化の物仕れと仰せ下さるゝ事、いまだ承り及ばず」と申しながら、勅宣なれば、召に応じて参内す。頼政頼み切ったる郎等、遠江国の住人、猪早太に、母衣の風切作いだりける矢負はせて、唯一人ぞ具したりける。我が身は、二重の狩衣に、山鳥の尾を以て作いだりける鋒矢二筋、滋藤の弓に取り添へて、南殿の大床に伺候す。頼政矢二つ手挟みける事は、雅頼の卿、その時はいまだ左少辯にておはしけるが、「変化の者仕らんずる仁は、頼政ぞ候ふらん」と選び申されたる間、一の矢にて変化のもの射損ずる程ならば、二の矢には、雅頼の辯の、しや頸の骨を射んとなり。

案の如く、日来人の申すに違はず、御悩の刻限に及んで、東三条の森の方より、黒雲一むら立ち来て、御殿の上にたなびいたり。頼政きつと見上げたれば、雲の中に怪しき物の姿あり。射損ずる程ならば、世にあるべしとも覚えず。さりながら、矢取つて番ひ、「南無八幡大菩薩」と、心の中に祈念して、よつ引いて、ひやうど放つ。手答して、はたと中る。「得たりや、をう」と、矢叫をこそしてんげれ。猪早太つと寄り、落つる処を取つて押へ、柄も拳も透れ〳〵と、続け様に九刀ぞ刺いたりける。その時上下手々に火を燃して、これを御覧じ見給ふに、頭は猿、躯は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにて、鳴く声鵺にぞ似たりける。恐しなどもおろかなり。主上御感の余りに、獅子王と申す御剣を下さる。宇治の左大臣殿これを賜り次いで、頼政に賜ばんとて、御前の階を半ばかり下りさせ給ふをりふし、頃は卯月十日あまりの事なれば、雲井に郭公、二声三声おとづれて通りければ、左大臣殿、

ほとゝぎす名をも雲井にあぐるかな

と仰せられかけたりければ、頼政、右の膝をつき、左の袖をひろげて、月をすこし傍目にかけつゝ、

弓はり月のいるにまかせて

と仕り、御剣を賜はりてまかり出づ。この頼政の卿は、武芸にも限らず、歌道にも優れたりとぞ、時の人々感じ合はれける。さてかの変化のものをば、空舟に入れて流されけるとぞ聞えし。

又応保の比ほひ、二条の院御在位の御時、鵺という化鳥、禁中に鳴いて、しばしば宸襟を悩し奉る事ありけり。然れば先例に任せて、頼政をぞ召されける。頃は五月二十日あまり、まだ宵の事なるに、鵺たゞ一声におとづれて、二声とも鳴かざりけり。目さすとも知らぬ闇ではあり、姿形も見えざりければ、矢所もいづくとも定め難し。頼政が謀に、先づ大鏑取つて番ひ、鵺の声したりける内裏の上へぞ射上げたる。鵺、鏑の音に驚いて、虚空にしばしぞひゝめいたる。次に小鏑取つて番ひ、ひいふつと射切つて、鵺と並べて前にぞ落したる。禁中ざゝめき渡つて、頼政に御衣を被けさせおはします。今度は大炊の御門の右大臣公能公の賜はり次いで、頼政に被けさせ給ふとて、「昔の養由は雲の外の雁を射き。今の頼政は雨の中の鵺を射たり」とぞ、感ぜられける。

五月闇名をあらはせる今宵かな

と仰せられかけたりければ、頼政、

たそがれ時も過ぎぬと思ふに

と仕り、御衣を肩にかけてまかり出づ。その後伊豆国賜はり、子息仲綱受領になし、我が身三位にして、丹波の五箇の庄、若狭の東宮河を知行して、さておはすべかりし人の、由なき謀反起いて、官をも失ひ参らせ、我が身も子孫も、亡びぬるこそうたてけれ。

（同前）

◇

さて、名どころの宇治を舞台とする狂言に「通円」と「簸屑」がある。

念願の都見物を了え、奈良を目指す一人の東国方より出でたる旅僧が宇治橋のたもとに着くと、誰も居ないのに茶の湯を

手向け花を供えた茶屋がある。そこで不審に思い辺りの者に訊くと、その昔、通円と称す茶屋坊主が宇治橋供養の時、茶を点て過ぎて果てた跡だと語って回向を乞う。

その夜、茶屋に旅寝する僧の夢に件の通円の霊が現れ、三百人余りの巡礼者に大茶を点てて争っては負けた最期を物語る。濃茶茶わん・茶せん・ひしゃくの作り物が出される。複式夢幻能（「頼政」の手法）仕立ての狂言「通円」である。

事実、この茶屋坊主は、もと宇治橋の南岸に住む農民だったが、後に古川通円と名宣って茶業に手を染め、また大慶安と号して茶道を究め、同所の（通円）茶屋が広く世に知られたことは、「伝言近世宇治橋辺有二通円法師者一。構二茶店於宇治橋側一、施二茶於諸人一、為二結縁一。」（『雍州府志』九）をはじめ俳諧や浮世草子などにも見え、『柳多留』（一七六五初）篇にも「通円は宇治ある家の立場茶屋」とある。

その後、家は代々続き、公費による茶屋の改築がなされたというし、大徳寺には初代通円の遺墨類が伝えられているとも言い、茶道と名だたる宇治茶をいやが上にも高めた功績はすくなくない。今でも宇治橋に佇むと、かの通円が微笑みかけてくるようで、大蔵流（狂言方）で用いる「通円」の専用面がその面影をよく伝えていると言えよう。現在は廃絶した鷺流にもあり、大蔵・和泉両流の現行曲とする出家物（座頭物）の狂言。

「簸屑」（ひくず）は、宇治に住む男が道者（巡礼）に茶の接待をしようと、用意した簸屑（茶を箕で振るったあとの屑茶のこと）を太郎冠者に挽かせるところから展開する。太郎冠者は言いつけどおり挽きはじめるが、途中にわかに眠気を催し、次郎冠者がそばから注意をしてくれるが、その甲斐もなくその場に寝てしまう。そこで怒った次郎冠者が鬼の面をかぶせておくと、目がさめて、鬼になったと思い込んだ太郎冠者が主人に泣きつく。鬼の太郎冠者は、次郎冠者にさんざんからかわれるが、取りついたはずみに面がはずれてすべてがわかり、怒った太郎冠者が次郎冠者を追い込むというもの。和泉流だけにみえる太郎冠者物の狂言。類曲に「抜殻」（ぬけがら）がある。

宇治の里に住む住人が、宇治橋供養のさい参詣人に薄茶の接待をしようとする前提は、前掲の「通円」と同様の趣向で、

太郎冠者の眠気覚ましに次郎冠者が小舞の「七つ子」を舞う。

◇

今も宇治橋のたもとに遺る通円茶屋は、吉川英治の『宮本武蔵』にも記されているが、創業は今から約八百四十年前の永暦元年（一一六〇）にさかのぼるという。

元祖は古川右内という源頼政の家臣で、武術にすぐれており、晩年、隠居して頼政の政の一字を賜って太敬庵通円政久と名乗り、宇治橋東詰に庵を結んだ。のちに、治承の役（一一八〇）が起きたときは主君頼政のもとにはせ参じ、ともに平家の軍と戦って討死にをとげ、今その主従の墓は、平等院の庭に静かに眠っている。

その後、子孫代々通円の姓を名乗って宇治橋の橋守（守護職）を仰せつかり、道往く人びとに橋の長久祈願と旅人の無病息災を願って、茶を一服ずつふるまって来たのである。

通円第七代は一休宗純和尚（一三九四～一四八一）と親交厚く、参禅して隠者となり、たがいに肝胆相照らす仲だったようで、康正元年（一四五五）に卒しているが、このとき、一休はわざわざ宇治の庵に来て、「一服一銭一期の泡」としたためた書を贈っている。第八代通円は将軍足利義政（一四三六～九〇）の同朋衆で、茶坊主として仕えていた。また宇治橋の守護でもあった十代、十一代通円は、豊臣秀吉（一五三六～九八）の信任をうけて宇治川の水を汲み上げる大役を仰せつかっていた。茶事に関心の深かった秀吉は、伏見城在城の時、城中で大名や茶人を招いてしばしば茶会を催し、その時に用いる水は、当時、〝天下の名水〟といわれた宇治川の水を宇治橋三の間より汲むため、千利休に命じて特別に作らせた釣瓶（つるべ）で五更の時刻（日の出までのおよそ二時間あまりの間）に汲み上げ、伏見城にもって帰ったという。その時の釣瓶は代々の通円に受け継がれ、今日まで保存されている。

吉川英治の『宮本武蔵』の中で、お通が通円茶屋で城太郎と一緒に休む情景が出てくる。武蔵は京都の吉岡道場で試合を行い勝ったものの、再試合の返事を弟子の城太郎へ道場にもらいに行くように頼み、自分は一足先に奈良の宝蔵院へ向かう。城太郎は返信を竹筒に入れて武蔵の後を追うが、宇治橋へ差しかかる途中、歩くのが面倒臭くなって、俵を積んだ牛車にこっそり飛び乗ってズルを決めこみ、牛方にみつかってひどく叱られているのを、通りかかったお通が助けてやる。そして宇治橋のたもとにある通円茶屋に休んで、お茶やお菓子を食べるが、お通はその子が探し求める恋人武蔵の弟子の城太郎とは露知らないわけである。妖しいまでの運命のいたずらとでもいえる。吉川英治の見事な筆致になるこの場面は、読むものをしてハラハラとさせる。『奈良へはまだ遠うございますか』とお通は主人（通円）に尋ねる。茶売りの老主人は『女子一人でこれから見ず知らずの、しかも浪人がうようよいる奈良へは物騒だ。幸いここにおられる柳生様に頼んで、一時柳生の城に身を寄せてはいかがですか』とすすめるのだが、これが縁となって、武蔵との再会のチャンスがめぐりこようとは、そこにいる誰もが、知るよしもなかった。

現在の店舗は、約三百三十年前に建てられた江戸時代の町家の遺構を残す貴重な建造文化財として、京都府より認められた建物で、正面から見ると、深い前庇と、間口が広いわりに柱を少なくしたふしぎな感じを与える建物となっている。これは昔から賑やかな往来の人びとが、出入りしやすい様に考えたためで、太い梁を使って〝はね木〟を押えている江戸時代初期の古風な建築法である。店の間には数百年を経たにぶい光をはなつ茶壷が並び、一休宗純より賜った通円の木像が正面に祀られている。そして、足利義政・豊臣秀吉・徳川家康をはじめ諸大名の多くが、この茶屋で茶を召上ったことが記録に遺っているという。京や大和路へ往き来した昔の人びとが出入りしたであろう面影が偲ばれる。

◇

それでは次に、各曲の若干の考察に移ろう。まず「頼政」は、先の『平家物語』にも記されているように、御所の主上を悩ます鵺（鵺）という怪鳥を射止めた武将であるとともに、勅撰集に五十九首入集、『源三位頼政卿集』を遺す歌人としても知られるが、治承四年（一一八〇）五月二十六日、宇治川の合戦に敗れ、かの平等院で七十五年の生涯を終えている。

「頼政」は、三修羅物の中でも、

これまた、一体の物なり。よくすれども、面白き所稀なり。さのみにはすまじきなり。ただし、源平などの、名のある人の事を、花鳥風月に作り寄せて、能よければ、何よりもまた面白し。これ、殊に花やかなる所ありたし。（『風姿花伝』第二物学条々「修羅」）

とするにもっとも近い作品となっている。そして『三道』（『能作書』とも、応永三十年・一四二三）では、

一、軍体の能姿。仮令、源平の名将の人体の本説ならば、殊に殊に平家の物語のままに書くべし。

とし、「一、大よそ三体の能、近来、おしいだして見えつる、世上の風体の数々、」と、「通盛」「薩摩守」（忠度）「実盛」「頼政」「清経」「敦盛」とともに「如」此軍体。」など、「此能をもて、新作の本体とすべし。」とされている。ともあれ、「頼政」といえば扇の芝というイメージが強いが、宇治橋合戦や辞世の歌と自害については本説に忠実であるが、扇の芝という設定は、『平家物語』『源平盛衰記』ともに見当らず、実はこのあたりに能作者世阿弥の卓越した才能を見ることができる。

一方、やはり世阿弥の作とされる「鵺」も本説を拠りどころとしながら、前シテ舟人登場、サシの一句「悲シキカナヤ」が『五音』に見えるが、作者についてはふれるところが見当らない。「頼政」といえば鵺という強烈なイメージによっておそらく世阿弥以降の人物の作かと推定される。

いま、「鵺」のように、人体以外の主人公を扱った曲を現行曲の中から作者とともに抄出してみると、「現在鵺」（シテ鵺、

作者不詳）を筆頭に、

○大蛇　後シテ　大蛇　小次郎信光作
○胡蝶　後シテ　胡蝶の精　小次郎信光作
○鷺　シテ　鷺　作者不詳
○石橋　後シテ　獅子　作者不詳
○猩々　シテ　猩々　作者不詳
○殺生石　後シテ　野干　左阿弥作
○大瓶狸々　後シテ　猩々　作者不詳
○道成寺　後シテ　蛇　小次郎信光作
○土蜘蛛　後シテ　土蜘蛛　作者不詳
○鶴亀　ツレ　鶴・亀　作者不詳
○竜虎　後シテ　虎　後ツレ　竜　作者不詳

等の十数曲をあげることができる。

「現在鶴」は、金剛・喜多両流の、いわば下掛り流儀の現行曲で、作者不詳の四番目複式夢幻能である。素材は『平家物語』巻四、『源平盛衰記』巻十六で、「頼政」や「鵺」と同様であるが、本曲では、鵺を射止める頼政を登場せしめ、いわば実録譚の構成となっている。

舞台は、物語に書かれている近衛天皇の代の禁裏で、まず大臣（ワキツレ）の登場、近衛院が病に苦しむのは妖怪（鵺）のしわざであるとし、これを源三位頼政（ワキ）に射させるべき宣旨がのべられる。そして頼政と大臣との問答となり、かつて後冷泉院の御悩みや、土蜘蛛－紀州－のことなどが語られ、頼政がその怪鳥退治に出掛ける。－中入－

後段、頼政が猪ノ隼太（後ワキツレ）とともに登場、妖怪・鵺（シテ）が現われるのを待ってこれを射止め、隼太の太刀で刺して退治する。この頼政の鵺退治については、『太平記』巻二十一「塩谷判官ざん死ノ事」に、

或時月深夜閑テ、荻葉ヲ渡風身ニ入タル心地シケル時節、真都ト覚都検校ト、二人ツレ平家ヲ歌ケルニ、「近衛院ノ御時、紫宸殿ノ上ニ、鵺ト云怪鳥飛来テ夜ナ〳〵鳴ケルヲ、源三位頼政勅ヲ承テ射テ落シタリケレバ、上皇限ナク叡感有テ、紅ノ御衣ヲ当座ニ肩ニ懸ラル。「此勧賞ニ、官位モ闕国モ猶充ニ不レ足。誠ヤラン頼政ハ、藤壷ノ菖蒲ニ心ヲ懸テ堪ヌ思ニ臥沈ムナル。今夜ノ勧賞ニハ、此アヤメヲ下サルベシ。但シ此女ヲ頼政音ニノミ聞テ、未目ニハ見ザンナレバ、同様ナル女房ヲアマタ出シテ、引煩ハヾ、アヤメモ知ヌ戀ヲスル哉ト笑ンズルゾ。」ト仰ラレテ、後宮三千人ノ侍女ノ中ヨリ、花ヲ猜ミ月ヲ妬ム程ノ女房達ヲ、十二人同様に装束セサセテ、中々ホノカナル気色モナク、金沙ノ羅ノ中ニゾ置レケル。サテ頼政ヲ清涼殿ノ孫廂ヘ召レ、更衣ヲ勅使ニテ、「今夜ノ抽賞ニハ、浅香ノ沼ノアヤメヲ下サルベシ。其手ハ緩トモ、自ラ引テ我宿ノ妻ト成。」トゾ仰下サレケル。頼政勅ニ随テ、清涼殿ノ大床ニ手ヲウチ懸テ候ケルガ、何モ齢二八計ナル女房ノ、ミメ貌絵ニ書共筆モ難レ及程ナルガ、金翠ノ粧ヲ飾リ、桃顔ノ媚ヲ含デ並居タレバ、頼政心弥迷ヒ目ウツロイテ、何ヲ菖蒲ト可レ引心地モ無カリケリ。更衣打笑テ、「水ノマサラバ浅香ノ沼サヘマギルヽ事モコソアレ。」ト申サレケレバ、頼政、

五月雨ニ沢辺ノ真薦水越テ何菖蒲ト引ゾ煩フ

トゾ読タリケル。時ニ近衛関白殿、余ノ感ニ堪カネテ、自ラ立テ菖蒲ノ前ノ袖ヲ引、「是コソ汝ガ宿ノ妻ヨ。」トテ、頼政ニコソ下サレケレ。頼政鵺ヲ射テ、弓箭ノ名ヲ揚タルノミナラズ、一首ノ歌ノ御感ニ依テ、年月久恋忍ツル菖蒲ノ前ヲ給ツル數奇ノ程コソ面目ナレ。」ト、真都三重ノ甲ヲ上レバ、覚一初重ノ乙ニ収テ歌ヒスマシタリケレバ、師直モ枕ヲヽシノケ、耳ヲソバダテ聞ニ、簾中庭上諸共ニ、声ヲ上テゾ感ジケル。平家ハテヽ後、居残タル若黨・遁世者共、「サテモ頼政ガ鵺ヲ射タル勧賞ニ、傾城ヲ給タルハ面目ナレ共、所領カ御引出物カヲ給リタランズルニハ、莫太劣哉。」ト

申ケレバ、武蔵守聞モアヘズ、「御邊達ハ無下ニ不当ナル事ヲ云物哉。師直ハアヤメホドノ傾城ニハ、国ノ十箇国計、所領ノ二三十箇所也トモ、カヘテコソ給ラメ。」トゾ恥シメケル。

と見える。

この歌は『従三位頼政集』には載らず、『平家物語』佐々木本に拠ると思われるが、何に拠ったか明らかにしがたい。『沙石集』巻五に載る類語（源頼朝が京からつれて下った菖蒲を梶原三郎兵衛尉が所望したので、同じ年頃の女房十人を出して選ばせ、梶原は選び得ず歌を詠んだ）との前後について、『倭訓栞』は『沙石集』を先とし、『春湊浪話』は『沙石集』の著者無住が八十三歳の時だったから頼政の事を「覚へたがひて」書いたかという。『蒙求』中、緑珠堕楼は中国の説話であるが、この菖蒲の話の根源をなしているかも知れない。ここの説話は史実ではないから実在の人をあてることは不可能。『源平盛衰記』では鳥羽院が自ら立って女を頼政に授けたことになっている（古典文学体系本頭注）。としている。また、菖蒲の説話は内容を異にするが、『源平盛衰記』巻十六「菖蒲前ノ事」に載り、『沙石集』巻五に類話があるが、『太平記』と同じものが現存『平家物語』諸本の中では佐々木本巻四、鵺の条にだけある事を山下宏明氏が発見された（昭和三十二年十月二十七日中世文学会での研究発表「平家物語伝本考—屋代本をめぐって—」）とする。

さて狂言「通円」の、都からの三百人に残らず茶を飲ませて点て死した件を、カケリを入れて謡い舞うのは、能「頼政」のパロディであるとともに、元祖を源三位頼政の家臣としている伝承も、きわめて興をそそらされることである。

前半で、茶碗に柄杓、後半に団扇を持って舞うのは独特の趣向であり、その型も酒脱である。なお江戸時代後期に作られた狂言に「現在通円」があり、現在は廃曲となっているが、能の「鵺」と「現在鵺」に比される。

いま本曲の素材を考えるうえで参考となるのが、「狂言不審紙」であろう。

通円いつの比より始ると云事さだかならず。通円もとは宇治の百姓にて、古川通円と名乗りしが中絶す。中興通円より今、文政癸未までは廿代相続と云。按に、中興通円よりも三、四百年になるべし。豊臣秀吉公通円御意に叶。宇治御巡

見の時は、通円へ御立寄御茶をあげしとぞ。夫より宇治橋守に被仰付。今も宇治橋御普請の時、通円居宅も御普請有。御巡見所と言。

とある。

◇

以上は源三位頼政をめぐる「頼政」「鵺」「現在鵺」、「通円」「現在通円」といった謡曲（能）・狂言の姉妹曲・関連曲の、素材・典拠ともいうべき本説を掲げてみたわけであるが、その考察を今一歩すゝめてみよう。

「頼政」と「鵺」は五流（観世・宝生・金春・金剛・喜多）現行曲であるが、「現在鵺」は金剛・喜多両流の現行曲で、「頼政」は『平家物語』巻四の「橋合戦ノ事・宮の御最期ノ事」であるが、「鵺」と「現在鵺」は『平家物語』巻四の「鵺ノ事」であり、かつ『太平記』が絡んでいるのである。しかも鵺を扱う場合、前者は夢幻能、後者は現在能として下掛り流儀の曲であり、後世の資料ながら作者について記載するところが全く皆無である。

「頼政」は、先の『三道』の他『世子六十以後申楽談儀』十六段「能書くやう、三」に、

八幡　相生　養老　老松　塩釜
蟻通　箱崎　鵜ノ羽　盲打　松風村雨
百萬　桧垣ノ女　薩摩守　実盛　頼政
清経　敦盛　高野　逢坂　恋重荷
佐野ノ船橋　泰山府君　是以上、世子作

とあるほか、『能本作者註文・歌謡作者考・異本謡曲作者・二百十番謡目録・自家伝承・観世大夫書上』等こぞって世阿弥

作としており、これを疑う余地はなかろう。この世阿弥作二十二番の修羅物五番中に「頼政」を入れているのである。そして『古今集』から、

○ちはやぶる宇治の橋守汝をしぞ　あはれとは思ふ年のへぬれば（巻第十七－九〇四よみ人しらず）

○わが庵は宮この辰巳しかぞ住む　世を宇治山と人はいふなり（巻第十八－九八三きせん法師）

○うちわたす遠方人にもの申すわれ　そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも（巻第十九－一〇〇七よみ人しらず）

の、まさに宇治に因む三首を引き歌としている。

一方の「鵺」であるが、『能本作者註文・異本謡曲作者』に世阿弥作とあるものの、『歌謡作者考』には記すところなく、『二百番謡目録』に観阿弥、『自家伝承』に観阿弥・世阿弥、『観世大夫書上』に世阿弥節付とあって、作者考定資料に限りまちまちであるが、奥書なく成立年不詳の『五音』に、前シテ登場サシの、

悲シキカナヤ

という一句が見え、作者名が付せられないま、世阿弥作と推定されている。この辺りの事情を如何に解くべきか、作品構成の分析だけでは如何ともし難い。作者資料にも全く記載なく引き歌も見当らないま、下掛り流儀の現行曲とする「現在鵺」の方は、「頼政」と「鵺」につぐ合作パロディーと見ることができないであろうか。

なお「鵺」には、『後撰集』から、

さらばよと別れし時にいはませば　我も涙におぼゝれなまし（一三四二伊勢）

の一首を引く。

◇

さて、二代の内の作と伝える狂言「通円」は、全篇の構成が「楽阿弥」に類似している舞狂言の一曲で、茶屋坊主通円の霊が、茶を点て死した時のことを舞ってみせる点が大きな山場で、「頼政」のパロディーともみえるように、その詞章を面白く狂言化している。つまり、ワキの待謡、

思ひ寄る辺の波枕、思ひ寄る辺の波枕、汀も近くこの庭乃扇の芝を片敷きて、夢の契りを待たうよ

そしてキリの、

跡弔ひ給へ御僧よ、仮初めながらこれとても、他生の種の縁に今、扇の芝乃草のかげに、帰るとて失せにけり、立ち帰るとて失せにけり

の狂言化と云えようか。

参考文献

1. 能 ― 現行謡曲解題（全）（昭和五十九年十一月、錦正社）
2. 観世流謡曲全集（昭和四十五年十一月、檜書店）
3. 佐藤謙三校註『平家物語』上巻（昭和五十五年八月、角川文庫版）
4. 『太平記』（昭和六十一年六月、岩波書店刊「日本古典文学大系」）
5. 作品研究「頼政」（松本雍）他（昭和四十九年五、六月、観世「頼政」特集）
6. 作品研究「鵺」（島津忠夫）他（昭和六十一年五、六月、観世「鵺」特集）
7. 宇治「通園茶屋」の伝承

8．猿楽能狂言お茶談儀妙考（平成十一年三月、二松学舎大学論集第四十二集）

「頼政」「鵺」、そして「通円」